

29. 当院における穿孔性十二指腸潰瘍の治療についての検討

(朝霞台中央総合病院外科) 八木美徳

1989年より1993年までの5年間、当院において、穿孔性十二指腸潰瘍は全26例で、そのうち観血的に治療を行ったのは20例、保存的に治療を行ったのは6例であった。

当院においては穿孔性十二指腸潰瘍の疑いをもたれた症例には上部消化管内視鏡、腹部CT等を施行し、その程度を判断し、また、年齢、潰瘍歴、患者の性格等を加味し、治療方針および手術術式を決定している。

今回は穿孔性十二指腸潰瘍の保存的療法を行ったものにつき、症例を呈示して報告する。

30. 当院における消化管穿孔(胃、十二指腸潰瘍穿孔を除く)23例の検討

(牛久愛和総合病院) 村瀬 茂

1989年より1994年1月までに当院で経験した胃、十二指腸潰瘍穿孔を除く消化管穿孔23例につき特に診断面から検討した。穿孔の原因は外傷、特発性、憩室、大腸癌、軸捻、魚骨等で、22例に手術を施行した。23例中20例において、概ね早期に腹腔内遊離ガスが証明されていた。遊離ガスを認めていない3例は、注腸造影で穿孔を確認した2例と腹腔内大量出血を合併した1例で、どちらも早期に手術を施行している。腹腔内遊離ガスの高い証明率は、当院ではいつでも緊急CT検査を、また繰り返し撮影可能であり、微量の遊離ガスが証明されるためと考えられる。当院では穿孔が疑われる症例に対しては来院時と翌日のCT検査、さらに大腸、十二指腸穿孔の疑いのある場合、造影を加えることで診断の遅延で失う症例が無いよう努めている。

31. 当院にて経験した興味ある内視鏡症例について

(中野江古田病院外科) 宮川隆平

当院にて経験した内視鏡症例の中で興味ある5例について報告する。内訳は消化管穿孔1例、消化管異物4例である。症例1は消化管穿孔の症例である。47歳、男性の腹部食道破裂による汎発性腹膜炎例であるが、全身状態が悪くドレナージ術にて救命し得た1例である。若干の文献的考察を加え、術中所見、術式を供覧する。症例2～5は、消化管異物の症例である。症例2は48歳、女性の胃内異物(義歯)の1例、症例3は45歳、男性の胃内異物(釘)の1例、症例4は24歳、男性の食道異物(正露丸のキャップ)の1例、症例5は66歳、女性の食道異物(PTP)の1例である。これ

らの消化管異物の4症例に関して、当院での内視鏡的異物除去術の工夫も交え、若干の文献的考察を加えて報告する。

32. 酸素運搬と酸素消費を指標とした重症管理について

(救命救急センター) 泰川恵吾

〔目的〕各種重症患者の管理に必要な酸素運搬量(DO₂)、酸素消費量(VO₂)および消費エネルギー量について検討する。

〔方法〕Swan-Ganzカテーテルによる代謝、循環管理を必要とした各種重症患者18例について、9時間おきにDO₂、VO₂を算出した。また消費カロリー量についてもFick法を用いて算出し、これらの値の変化と48時間以内の死亡率等について検討した。

〔結果および考察〕経過中、VO₂を100以上に保持することができた症例は10例で、48時間以内の死亡例はなかった。最終的にVO₂が100未満となった症例は7例で、48時間以内の死亡は3例(43%)であった。敗血症を除くほとんどの症例で消費カロリー量とVO₂とは、ほぼ正比例の相関を示し、状態によって大きく変動した。重症患者の管理においては、DO₂、VO₂および消費カロリー量を経時的に測定し、コントロールすることが重要な意義を持つと考えられた。

33. 悪性狭窄病変に対してステント留置を行った2症例の経験

(久我山病院外科) 米山公造

手術不能な悪性狭窄病変に内瘻化が可能なら、一定のQOLを患者に付加し得る。今回我々は食道癌と胆管癌患者に内瘻化を試みたので報告する。

症例1:53歳、男性。主訴:嚥下傷害。食道造影にて中部食道に約7cmの全周性狭窄を認めた。根治術目的で転院するも手術不能と診断され、放射線療法を66Gy施行後当院へ再入院となった。狭窄は軽度改善していたが経口摂取は流動物のみであったため、食道拡張術後人工食道を留置し退院した。

症例2:78歳、男性。主訴:黄疸。PTCD時に総胆管中枢部の全周性狭窄を認めた。経皮経肝的に胆管外瘻を拡張させ、ウオールステントを留置し、内瘻化に成功して一旦帰宅。しかし、1カ月後再狭窄をきたし、再び経皮経肝的にERBDチューブを留置して内瘻化をはかっている。

34. 新しいmetaric stentによる胆道内瘻化術の経験

(大分市アルメイダ病院外科) 笠井 恵

種々の原因による胆道の狭窄に対する保存的治療として metallic stent による胆道内瘻化術が普及しつつある。最近我々は形状記憶合金製の新しい metallic stent を用いる内瘻化術を経験した。第1例は75歳の男性で5年前に進行胆嚢癌に対して pig tail tube を用いて手術的に総胆管の内瘻化を行った。経過良好であったが腫瘍の発育により胆道系の狭窄が強くなるとともに tube が閉塞し、1994年2月2日内瘻化術を施行した。第2例は47歳女性、7年前に肝内結石に対して胆管空腸吻合術を施行されていたが、吻合部近傍に胆管癌が発生し閉塞性黄疸が出現。2月17日に内瘻化術施行。2例とも PTCS により guide wire を誘導したことが有効であったので手技を中心に報告する。

35. 当院における膵癌切除症例の検討

(聖隷浜松病院外科)

阿部展次

1976年11月から1992年9月までに当科で経験した膵癌切除症例29例について検討を行った。平均生存期間は20カ月であり、Kaplan-Meier 法による5年生存率は24%であり、最長生存例は16年6カ月であった。1年以内再発例は、stage III 42%、stage IV 58%で、癌性腹膜炎と肝転移が各々42%と高率であった。1年以上生存例は、stage I, II が多く、組織学的因子では $s_0, v_1 > r_{p_0}$, ew(-), 高分化腺癌が多かった。今回の検討により、膵癌の長期生存を得るには、術式よりは、upstaging のための早期診断、早期治療が必要と思われた。

36. 膵臓外科における血管再建について

(大分市アルメイダ病院外科) 白鳥敏夫

膵癌の切除率は未だに低く、その治療成績を一層不良のものとしている。切除率の向上のためには、門脈をはじめとする血管の切除再建が必要となり、外科医はその努力を怠るべきではない。我々の施設では、1985年5月以降膵癌切除例の過半数に血管の合併切除再建が行われている。これらの経験をもとに、主として門脈の再建法について、その手技を具体的に示す。また上腸間膜動静脈同時切除再建を行った鉤状突起発生膵癌の症例を呈示する。

37. 腹腔内デスマイドの1例

(中山記念胃腸科病院)

勝田和信

デスマイド腫瘍は、主として筋または筋膜より発生し、腹壁および腹壁外の報告は比較的多いが、腹腔内の報告例は稀である。今回我々は、横行結腸間膜より発生した腹腔内デスマイドの1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症例は、53歳女性で、上腹部痛を主訴に来院した。注腸造影で横行結腸に壁外性の圧排像を認め、超音波検査、CT では横行結腸、尾側脾および脾に接し約5cmの腫瘍を認めた。腫瘍の肥厚した壁の内腔に液状成分が存在し、造影CTでは腫瘍は強く濃染されたが、血管造影では hypovascular であった。悪性腫瘍を否定できず、左半結腸切除および尾側脾合併切除術を施行した。病理診断は、腹腔内線維腫症(デスマイド)であった。

38. 腹部腫瘤を呈した巨大水腎症の1例

(横浜新緑病院)

小川真平

今回我々は、腹部膨満感を主訴に来院した巨大水腎症を経験したので報告する。症例は、64歳の男性。腹部全体に亘る巨大な弾性軟の腹部腫瘤を認めた。US、CTでは隔壁を有する巨大な cystic tumor であった。DIPでは左腎は造影されず、また尿管結石を思わせる石灰化陰影を認めた。尿管結石による巨大水腎症と診断し左腎摘出術を施行した。摘出した標本は重量4.5kg、32×25×11cmの内部に隔壁を有する水腫で、拡張した尿管の先端に1×0.5×0.5cm 嵌頓結石を認めた。腎盂内には約4,000mlの尿貯留を認めた。肉眼的には正常な腎実質は認められなかった。腎盂内容量が1,000mlを越える水腎症は巨大水腎症と定義され、比較的稀であり若干の文献的考察を加えてここに報告する。

39. 虫垂粘液囊腫の1治療例

(豊岡第一病院)

中西明子

症例は82歳女性。主訴は右下腹部痛。初診時に右下腹部に著明な圧痛を伴う弾性軟の腫瘤を触知。血液検査では炎症反応を認め、回盲部周囲濃瘍の診断で入院。腹部US、骨盤部CTにて右下腹部に囊腫状腫瘤を認めた。保存的加療に反応し腫瘤の縮小と圧痛の改善を見たため待機手術を施行した。

開腹所見では、虫垂先端は12.6cmの囊腫状に緊満、腫大し腸詰様を呈していた。虫垂粘液囊腫と診断し回盲部切除を行った。切除標本では虫垂と盲腸との交通をわずかに認め、内腔は淡黄乳白色ムチン様の粘濁な物質で満たされていた。病理組織学的には、悪性所見は見られず、虫垂粘液囊腫 mucinous cystadenoma (Mucocoele) と診断された。

40. 当科における内視鏡検査の現状—細径超音波内視鏡検査所見を中心に—

(第二外科)

今井俊一

過去5年間に、当科における内視鏡検査件数は下部